

漱石全集
第二十八卷

書簡集

二

全三十四卷 第二十八回配本

昭和三十三年七月十二日 第一刷發行
昭和三十三年八月十五日 第二刷發行

漱石全集 第二十八卷

定價百五〇圓



著者 夏目漱石

發行者 岩波雄二郎

印刷者 山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三
株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

明治三十九年

三

明治四十年

二五

書簡番號索引

二

二六

解說

二九

注解

二六

明治三十九年

小島様

四〇〇

一月六日 土 後4—6 本郷區駒込千駄木町五七より

牛込區市谷砂土原町三丁目一八内田貢へ

拜啓イワンの馬鹿御寄贈を蒙り深謝早速讀了致候小生淺學にてイワンの原書をよまざりし爲め却て一段の興味を覺え候。どうかしてイワンの様な大馬鹿に逢つて見たいと存候。

出来るならば一日でもなつて見たいと存候。近頃少々感ずる事有之イワンが大變頼母しく相成候。イワンの教訓は西洋的にあらず寧ろ東洋的と存候。右不取敢御禮迄草々頓首。

一月五日夜 金之助

魯庵兄

三九九

一月四日 木 前(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五七より
り 松山市下京町小島武雄へ

拜啓賀狀拜見致候吉松氏任地にて評判よろしき由本懐の至うれしく候拙作御通讀被下候由難有奉謝候本年も相變らずつまらぬものをかゝねばならぬ事と存候御覽被下候は幸甚に候。本年より早稲田文學藝苑^{*}其他にて文壇も大分賑やかになり候。其間に立ちて出頭没頭の陋態を極め候事大悟の達人より見ば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候先は御返事迄 勿々頓首

明治三十九年

三十九年一月三日

金之助

四〇一

一月六日 土 後4—6 本郷區駒込千駄木町五七より

山口縣山口町白石松本源太郎へ

啓上

平素は御無沙汰に打過申譯無之候。新年は早速賀詞賜はり恐縮致候小生例の無精より年始も賀状も全廢と覺悟を定め候爲め斯の如く失敬致し候御容赦願上候。

山口の風物は熊本よりも御氣に召した事と存候。御身體も御壯健の事と存候。東京へ參りて何となく生還りたる心地致し候。熊本は思ひ出してもいやに御座候。

先は出任せ迄草々頓首

一月六日

金之助

松本先生

侍史

四〇二

一月六日 土 (時間不明) 本郷區駒込千駄木町五七より

廣島縣山縣郡加計村加計正文へ

拜啓

君の方はまだ正月が來ないでせうが東京はもう一兩日で門松を取り拂ひます。新年は何となく新年らしいもので此正月は講義を作る積りの所まだ一枚も作らない。去ればと申して遊びもしない。必竟何の爲めか分らん。只休暇中は朝寐をする許りです。三重吉君は芝居をやるさうです。素人芝居をやる元氣があれば大丈夫だと思ひます。君はぼーとを作つて居るさうですね。鯉は釣りませんか。今頃は雁位食へさうなものですな。本年から早稲田文學が出ます。上田君の藝苑といふ雑誌も出ます文壇頗る好景氣ですよ。僕は大學を辭職して書齋で炬燵にあたつてゐたい。君なんか金があるから羨しい譯ですな。先達て赤ん坊が生れました。僕は是で四人の女子を有するの榮をもつと云ふ騒ぎだが片付ける時の始末を想像するとゾツとするですよ。

一ヶ月許り三重吉先生の様^{*}に沖の小島へでも渡つて仙人的生活をして見たい。今日浦瀬君が來ました。あ

れは君と知己ださうですね。いつでも青い顔をしてゐる。田舎で面白い事はないですか。バカンポーが生れる妻君が熱が出る。三人の女子が代る／＼麻疹にかゝる杯は面白いですよ。源一郎福地といふ男が死んだ。今の學士や何かは學問文章共に出来るが女を口説く事と借金の手紙をかく事を知らないといふ演説をやつた男ださうだ。死んでも惜しくない人ですね。

先は是迄草々

一月六日夜

金之助

加計正文様

四〇三

一月八日 月 前(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五七よ

り 本郷區丸山福山町四伊藤はる方森田米松へ

啓、長い手紙を頂戴面白く拜見致しました。御世辭にも小生の書翰が君に多少の影響を與へたとあるのは嬉しい。夫程小生の愚存に重きを置かれるのは難有い

と云ふ譯です。小生は人に手紙をかく事と人から手紙をもらふ事が大すきである。そこで又一本進呈します。

「野菊」を御讀みの由。詳細の御拜見御尤もの事ばかりです。今度作者に逢つたら見せてやります。定めし喜ぶでせう。あの男は職業は牛乳屋で子規存生のみぎり一所に歌を研究して今でもアシビといふ雑誌を出して居る。小生は二三度會したぎり交際もない人です。あの作も一句一句吟味すると技巧の上では大分足らぬ所があると思ふ。君は讀むまいが矢張り前のホト、ギスに出た寺田寅彦と云ふ人の「團栗」とか「龍舌蘭」とかいふ作の方が遙かに技倆上の價値がある。只野菊に取るべき所は眞率の態度を以て作者が事件を徹頭徹尾描き出して居る點である。あれ丈の材料を普通の小説家がとり扱つたならもつと似非藝術的なものにして仕舞ふと思ふ。そこが頼母しい所だと思ふが、どうです。趣向は仰せの如く陳腐です。寧ろ月並臭を脱しない。然し仰せの如く月並臭くないからいゝ。そ

れから君の非難をする箇所は一々尤もである。僕も多少さう思ふ。但し女が死んでからの一段はあれでいゝ實際です。尤も君の云ふ様にすれば死といふものに對して吾人の態度が違つてあらはれてくる許りである。死に崇高の感を持たせやうとするときは、其方を用ゐるがよいと思ふが、死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくてはいかぬ。野菊の行きがゝりから云ふてあれでなくてはものにならない。調和せんと思ふ。死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある。此態度如何で讀者の感じが違つてくる。然も其色々な態度が皆眞といふ事がいへると思ふ。

女が猿股をいやがる所や、笠を被らない所は妙ですよ。つまり君の云ふ如く、あんな所で活動すると思ふ。女が死んで寫眞を持つて居るのは寧ろ幼稚です。もつと上等に行けばそんな眼に見えるものを持たないでそれ以上の感じを起させるがいゝ。然しそれは中々大手腕が入る。前後の關係から云つて、寫眞を握つて居た

ので一種の趣意が貫ぬいて、女の病死に落ち付きが出来るといふ點から見れば何にもかゝらないより善い。

病葉に就いて一言蛇足を添へるが。主人公が何だか六づかしい本を讀んで居る。あれは必要があるのですか。突然あれを讀むと。故意にあんな本を讀ませて居る様な、初心な氣障な感じがする。もつと長いもので主人公が一種の人物であんなものを讀むべき傾向を有して居るか、又はあの本があんな短篇中に一種の關係を有して居るなら故意とは思はれなかつたらう。尤も後段に一寸關係が出るがあれ丈では、あんな本をよます必用はないと思ふ。

容赦なく云へば君は文に凝り過ぎて失敗しさうな懸念が僕にある。あまり凝ると抜目がない代りに何となく窮屈な苦しい感じがするでせう。第一長いものは到底根氣がつかないと思ふ。

僕は君の文が出る度に讀みます。さうして時間の許す限り、心づく限りは愚評を加へる積りです。其代り

悪口を云つても怒つてはいけません。大學では君の先生

生かも知れないが個人として文章杯をかく時は同輩である。決して僕に對して氣を置いてはならぬ。君はあ

まりに神經的、心配的、人の心を豫想しすぎる様な傾向がありはせんかと思ふ。他人に對してはとにかく僕

に對してはさうせん方がいゝ。君も氣樂でいゝでせう。野村傳四杯は氣樂なものである。あまり長くなるから

是でやめます。 不一

一月七日

金之助

森田兄

四〇四

一月十日 水 前〇―5 本郷區駒込千駄木町五七より

仙臺市第二高等學校齋藤阿具へ〔はがき〕

昨冬はわざわざ御出被下今春は早速御出にあつかり奉拜謝候小生例の如く疎慵欠禮御免可被下候。もはや

仙台へ御歸りと存じ御詫迄一寸申上候以上

一月九日

四〇五

一月十日 水 後2―3 本郷區駒込千駄木町五七より

本郷區丸山福山町四伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあげます。もう少し立つと色々多忙になつて到底返事らしいものはかけないから只今少々ひまのあるのを幸にこれをかきます

君は大分長い手紙をかいてよこしましたね。あれ丈かくのは大分時間をとるに相違ない。僕の爲めになん原な勞力を費やさしたと思ふと中々頼母しい心持ちで讀みました。何か不平でも氣儘でも洩したい時に時間があつたらいつでも僕の所へ云つて寄こしてくれ玉へ。僕は讀むのを樂しみにして居る。其代り必ずそれに匹敵する長い返事は出されぬかも知れません。

野菊の墓の評をかいて下さる由定めし本人(即ち牛乳屋の主人)はよろこぶだらう。どうかかいてやつて

下さい。左千夫なんて聞いた事もない人だから誰も相手にしてはくれん。切角出色の文字でも誰も相手にせんで、甚だ氣の毒である。君が評をしてやれば僕も何だか愉快な氣がする。而も君の評は十中八九迄僕と同様であると思ふから猶更愉快である。然しわるいと感じた所は遠慮なく云ふてやつて下さい。本人の参考になります。

牛乳屋が氣に入つたといふのは見上げたものです。牛乳屋の主人の方が大學の講師よりも氣韻があると思ふ。顔も頗る雅な顔ですよ。あんなものがかけさうでもない。

君は衣食の爲めに充分學問が出来んのを苦痛に感じて居る様だが御尤もです。僕も貧乏で十八九の時から私立學校を教へて卒業迄やり通したが其時分は別は何と云ふ考もなかつたから左程驚きもしなかつた。是が今日の君の様であつたら矢張り大煩悶であつたらう。夏休みに金がなくつて大學の寄宿に籠城した事がある。

而して同室のものゝの置き去りにして行つた蚤を一身に引き受けたのには閉口した。其時今の犬塚君が新しい革靴を買つて歸つて來て明日から興津へ行くんだと吹聴に及ばれたのは羨やましかつた。やがて先生は旅行先きで美人に惚れられたと云ふ話を聞いたら猶うらやましかつた。

僕もその時分から眞の勉強(君の所謂ウイストムを得る工夫)でも熱心にしたら今はもう少し人間らしくなつて居るだらうと思ふ。其時分は本の名前を覺えて人に吹聴するのが學者だと思つて居た。趣味杯も低いものであつた。物の道理も今の若い人程は到底わからなかつた。要するに今でも愚物であるが當時は猶々愚物であつた。尤も見識はあつたが、只人を下げる見識で自分が證得したポジチヴの見識ではなかつた。

僕もそれだから大に聰明な人になりたい。學問讀書がしたい。従つてどうか大學をやめたいと許り思つて居ます。先達晚翠が年始狀をよこしてまだ教授になら

んかと云ふから「人間も教授や博士を名譽と思ふ様では駄目だね。失樂園の譯者土井晚翠ともあるべきものがそんな事を眞面目に云ふのはよくない。漱石は乞食になつても漱石だ……」と云ふ様な事をかいてやりました。あとで成程小供らしい氣焔だと氣がついた。

君が人の作を読む態度は甚だよろしいと思ふ。それでなければクリチズムは出来ない。只人の長所を傷けない丈の公平眼は是非共御互に養成しなければならん。僕は人の作に對して只面白く讀みたい。よんでやりたいと云ふ氣が先へ起る。然し讀んで仕舞つて是は敬服したといふ様なものはあまり少ない。矢張り西洋人の方がそんな感じを引き起させる事が多い。然し西洋人だからといつて決して一目置いて讀むのではない。二三日前鏡花の海異記とか云ふものをよんで驚ろいた。どうも馬鹿々々しいと云ふ感より外に起らなかつた。それから彼の文章のかき方がいやに氣取つて居て嫌だと云ふ感じがあつた。警句は無論澤山ある。あれをな

ぜもつとうまく繋げないのかと思ふ。かう感ずるが僕は鏡花に對して憎惡心も何も有して居らん寧ろ好意を以て迎へよむのである。こんなのは矢張り天性の趣味の相違でありませう。

君の手紙をよむと君の人間を貫ぬいて見る様な心持ちがします。君と二三月交際しても、あれ程には分るまい。人に自己を打ち明けるといふ事は放膽の所爲である。打ち明けられた人は其放膽をほめるのではない。他に打ち明けぬものを自分のみ打ち明けてくれたと云ふ特許を喜ぶのである。

自分の弱點に對しては二様に取り扱ふ方法がある。一は之を隠して自己の虚榮心を失望させまいとする。是は誰でもやつて居ます。僕もやつて居ます。然し決して満足が得られるものではない。一はコンフエツションである。然し無用の人若しくは此コンフエツションをきいて之を輕蔑する人若しくは之を利用して害を加へやうとする人には自白したくない。だから此場合

には己れの信ずる人、若くは敬する人、或は教を垂れて訓戒してやらうと思ふ人に自白するのである。其時は甚だ愉快を覺えるものだ。單に本人が愉快を覺えるのみならず。相手も快よく思ふ。君がもし君の書中に自己の弱點も構はず吐露したとすれば、其點に於て君は愉快である。僕が君の自白を聞き得たる相手とすれば僕も愉快である。

これからはいそがしくなるといつこんな長い手紙をあげられるか分らない。一先づ是で擱筆とします。以上

一月九日夜

金之助

森田兄

四〇六

一月十四日 日 本郷區駒込千駄木町五七より 清國南京

三江師範學堂菅虎雄へ

拜啓平生は御無沙汰をして濟まん。年禮も賀狀も今

年は全廢として見たが矢張り中川元さん杯からくるとさうも行かぬ。君の留守宅へも失敬して仕舞つた。いづれ妻がまかり出る。僕のうちでは又去年の暮に赤ん坊が生れた。又女だ。僕の家は女子専門である。四人の女子が次へ次へと嫁入る事を考へるとゾーツとするね。貯蓄をせんといかん。然るに去年の十二月杯は色々かゝつて三百圓近く仕拂つた。幸ひ著作の印税があつたので間に合つたが何しろ。金の入るのには驚くね。君は出来る丈貯蓄をせんとゆかぬ。君に返す金は矢張り十圓宛にして居る今年中位で濟むだらう。東京も別段變つた事もない。近頃は天氣がいゝ。狩野も大塚も藤代も例の如くだ。藤代位學校を欠勤する男は珍らしいね。僕大學をやめて江湖の處士になりたい。大學は學者中の貴族だね。何だか氣に喰はん。ホト、ギスを君の所へ送る様に依頼して置いたが行くだらうね。四月には歸るまいね。居られるならそちらに居るが、と思ふ。東京に口はなさうだ。まあ此位にして置か

う此手紙は君が呉れた純羊毫でかいたのだいっ迄立つても字はうまくならない。君の字は立派なものだ。御寺の額にでもありさうだ。繪端書には堅過ぎて釣り合はない 以上

正月十四日

金

虎 雄 様

四〇七

一月十六日 火 前0—5 本郷區駒込千駄木町五七より

芝區琴平町二朝陽館野間眞綱へ

今夜野村が雉子と巻紙を持つて来てくれました。御親切にありがたう存じます。あの紙は妙な紙だね。此紙は寺田が高知から持つて来てくれたものだ。先達ては橋口が白紙の巻紙をくれた。其前は菅が唐紙を支那から持つてきてくれた。僕は紙大盡だ。今年中は紙を買はずに済む。君憂鬱病のよし結構に存候。憂鬱も快活も全く本人の随意と存候。小生杯は一日に兩方やり

申候。昨日は野村と日本橋、神田、淺草を散歩致し候。柳橋で藝者に逢ひ候。其外竹本組玉、竹本團洲、都々逸坊扇歌の家をつきとめて歸り候。皆川には頓と逢はず候。 頓首

正月十五日

金

眞 綱 様

* 島津の若大將には此方から禮狀を出す

四〇八

一月十七日 水 後4—5 本郷區駒込千駄木町五七より

芝區三田君塚町一〇行村方皆川正禧へ

尊書拜讀野間は憂鬱病に罹つた由を申來候けしからぬ事に候。三十にもならないで憂鬱病杯と申す贅澤な事を申し候。

其後はしばらく拜顔の期を得ず。不相變餅を食つて御消光の事と存候。小生も例の如く漫然と消光致し居候、其うち會食でも致し度と存候

趣味の遺傳御讀み被下難有候。結末の一氣呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。實は時間がりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとか、んと、前の詳細な敘述な比例を失する様に思ひます。

あれは誤植誤字だらけであります。

野菊の墓の末段をわるく云ふ人は君の外にあります。森田二十五絃が同様の事を云つて來ました。僕はさうも思はない。東京邊の家庭にはこんな御シャベリな婆さんがあるものだと思存候。

野間が雉子を届けてくれました。是は島津の若旦那の御見やげです。昨夜無暗にたべた所今日腹がわるく候。

いづれ其内 草々

十六日

皆 川 兄

金

四〇九

一月二十一日 日 前〇―5 本郷區駒込千駄木町五七よ

り 小石川區竹早町狩野亭吉へ〔はがき〕

前略享保前後の漢學者の文集の名十ばかり御教示にあづかりたく候。御ひまの節かいてきて學校で御渡し被下ば幸甚。右御願迄 頓首

一月二十日夜

四一〇

一月二十四日 水 本郷區駒込千駄木町五七より 小石川

區竹早町一二〇愛知社中川芳太郎へ

拜啓ハーンから二十五圓來て懷中暖氣の由結構。然し二十五圓の金を見 夢の様だ抔とは頗る安い見に候。小生はこゝに百萬圓くれる人があつても夢の様にはなるまじく候。金を得てうれしく使ふのは當前に候。金を得て驚喜夢の様になるのは金に中毒したものに候。左様な心掛にては金さへ見れば何でもする様になり候。貧乏も心の持ち様では遙かに金持ちより高尚な氣がす

るものに候。是は入らぬ講釋をして失敬千萬に候。怒つてはいけません。奥山*にあるいて平氣な傳四は見所のある所原に候。傳四は學才と云ふて左程の事も無之候へどもあゝ云ふ所が長所に候。大兄は才學は遙かに傳四の上に候然し平氣な點は遠く傳四に及ばず候。五圓残つてゐるなら甘いものを食つてどんぐり運動をして將來に於て世の中と喧嘩をする用意をして御置きなさい。以上

一月二十四日

金

芳太郎様

四一

一月二十六日 金 後3-4 本郷區駒込千駄木町五七よ

り 麴町區富士見町四丁目八高濱清へ

其後御無沙汰仕候二月のほとゝぎすに何か名作が出来ましたか。僕つらく思ふにホト、ギスは今の様に每號版で押した様な事を十年一日の如くつゞけて行つ

ては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英氣を鼓舞して刷新をしなければいかないですよ。と申して別に名案もないから只主人公たる君が大奮發をするより外に仕方がない。文庫新聲杯*一時景氣のよいものが皆駄目になるのは時候後れだからと思ひます。ホト、ギスも賣れるうちに色々考へて置かぬとならんでせう。先づ巻頭に每號世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心ですね。夫から君は每號俳話をかいて、四方太は每號文話でもかいたらどうです。四方太は原稿料が出ないと云つてこぼして居るがあの男はいくら原稿料を出しても今の倍以上働くかどうか危原しいものだ。とにかくもつと活氣をつけたいですね。小生餘計な世話を焼いて失敬だがホト、ギスが三四千出るのは寧ろ異數の觀がある、決して常態ではない油斷をしては困る事になると思ひます。

そんなら僕に何かかけと來るかも知れんが僕は取りのけ別問題です。一寸手紙をかく序があるから是を差

し上げます。苦い顔をしてはいけません 頓首

一月二十六日 金

虚子様

四二二

一月三十一日 水 後4—5 本郷區駒込千駄木町五七よ

り 清國南京三江師範學堂菅虎雄へ〔封筒に「要事親展」とあり〕

拜啓先日の手紙は狩野に見せた。藤代にも相談をした。然るに東京では先便申した通りどこにも口がない。高等學校へ復校の事を一寸狩野に云つて見たら金は一文も出ないといふ。そこで我々の意見では君が歸つたら歸つた時の分別として其時にどうかする積である。然しもし出來得るならば相當の見込が立ちて差支なき迄南京に居るのが得策である。菊池にあゝ云ふ風に斷言する以上は菊池と並び立ち譯には行くまいが菊池の方でやめるなら君は留任してもよいだらうと思ふ。是

は僕一人の考ではない狩野も藤代も同意見である。元來喧嘩をして相手が居るのに自分の方が引くのは間違つて居る。是非共相手をやめさせなければならん。もし相手がやめれば自分は辭職する必要はないものと思ふ。

辭職事件に係してこんな事がある。狩野の方で金が多少儲かる事業があるさうだ。今資金を投ずれば慥かに二倍になると云ふ話である。所で萬一君が四月にでも歸朝してすぐ口がないと假定すると君の貯蓄が一錢でも多い方が便利である。からして今君の貯蓄金を擧げて狩野に一任して貨殖の道を圖るがよからうと思ふ。僕は詳しい事情は分らぬ。只狩野のいふ事だから間違はないものとして報知する。實は我々で勝手に處理して事後承諾を求める積りであつたが夫はよろしくあるまいといふので一應相談する事にした。一二日でも遅くなればなる程損が行くのださうだ。だから此手紙がつき次第同意ならばよしといふ電報を打つてくれ。